

神奈川県高等学校教科研究会理科部会・夏季地学研修会で現地案内を行いました (2011/8/26-27)

8月26日(金)～27日(土)の2日間にわたり、神奈川県高等学校教科研究会理科部会によって主催された夏季地学研修会(見学会)における「東北地方大津波被災地の見学」にて、理学研究科の箕浦教授と、当センターの菅原研究員が講師をつとめ、宮城県沿岸部の現地案内を行いました。今回の見学会は、東北地方太平洋沖地震・津波の発生を受けて、高等学校教育における総合科目や地学に関する理科カリキュラムの参考とするものとして開催されました。当日は、神奈川県内の理科教員ら16名が参加しました。この巡検では、多賀城周辺から仙台空港までの地域で津波による被害状況を見学したほか、今回の津波および貞観津波の堆積物についても直に観察しました。多賀城では、貞観津波で浸水を免れた言い伝えが残る「末の松山」を訪問し、今回の津波でも同様に津波が及ばなかったことを確認しました。仙台市若林区の荒浜周辺では、貞観当時の地層断面を観察し、当時の海岸の位置や貞観津波で堆積した砂の層を確認しました。参加者は地学に関心のある理科の先生が多く、貞観津波の堆積物のサンプルを採取していました。



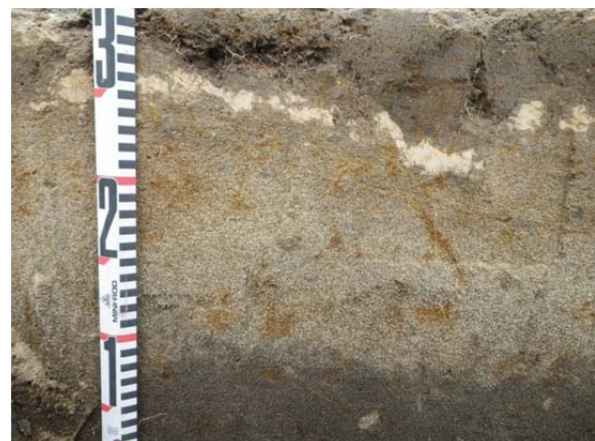
箕浦教授の説明に注目する参加者の方々



堆積物(現物)の解析にあたる菅原研究員



今回の津波による浸水域を調査した際の「末の松山」(写真奥)。津波はこの写真を撮影した位置まで迫った。



白い層は西暦915年の火山灰で、その下に見える明るい色の砂層が、貞観津波の堆積物。その下は当時の地表であった堆積物と考えられる泥混じりの砂。